

佐々木信綱註  
校註方丈記



特45  
727



佐々木信綱註

校註方丈記

東京堂書房藏版



校註方丈記

緒言

方丈記の著者鴨長明は、山城國賀茂の社の氏人なり。祖父を秀綱、父を長隆といひて、累代賀茂の社の禰宜たり。長明幼名を菊大夫、また南大夫といふ。二條天皇の應保元年十月、從五位下に叙せられ、ねねを高倉天皇の安元治承の頃、社務職に補せられん事を請たりしに、其事かなはざりしかば、おほけにを憤りて出家し、洛外大原の里に退隱したりき。その頃、先だちて世をむさける人のもとに、

いづくより人へ入りけん眞葛原秋風ふきしみちよりぞ來し又新古今集雜下に、身の望かなひ侍らで、やしろのまじらひもせ

で、こもりおて侍りけるに、葵を見てよめる。

見れば先いと涙ももろかづらいかに契りてかけ離れけん  
土御門天皇の建仁元年、後鳥羽上皇和歌所を置き給ひ、源家長を  
開闢とし、藤原成範、鴨長明、藤原秀能等を寄人にすゑらる、されど  
幾ほどもなくして、辭して退去す。その後、上皇もとの如く寄人に  
かへし補せらるべきよし勅ありしよ。

沈みにきいま更わか、の浦浪によせばやよらん海士のすて舟  
この歌を奉りて、かさねて仕へず、東南北越の靈區をめぐり、多く  
の勝縁をむすべり。家集に、美濃國の虎溪といふ山にひきこもり  
侍りしころ、參學のともがらとぶらひ來り侍りければ、

世のうさにかへたる山の寂しさを訪はぬぞ人の情なりける

順徳天皇の建暦元年に、鎌倉にものしたびく、實朝公に謁した  
りき。そは東鑑卷十九よ、十月十三日辛卯、鴨社氏人菊大夫長明入  
道、法名依雅經朝臣之擧、此間下向、奉謁將軍家及度々云々、而今日  
當幕下將軍御忌日、參彼法花堂、念誦讀經之間、懷舊之淚相催、註一  
首歌於堂柱。

草も木もなびきし秋の霜きえてむなしき苔をはらふやま風  
さて歸り來て、幽居を日野の外山ようつし、方丈の室にこもりて、  
こゝろざしを養ひ、そにて終を全くせられぬとぞ。心散僧都の  
さゝめむとの記に、長明が石の床よ、後鳥羽上皇二度御幸あり  
きとぞ。誠にありがたき世のおぼにこそ。件の石の床、いまも外  
山にあり。と見え、また草山集卷四に、遊石田記にいふ訪鴨長明舊

蹤、幽居之態、其方丈記盡焉。有巖俗名方丈石、或云千人石、高二丈許、其上幾平而可坐數十人云々。また幽齋法印の集、日野といふ處にまかりけるついでに、長明の憂世をはなれてすまひせしよし申し傳へ侍る外山の庵室の跡を尋ねて見侍るに、大きな石の上、松の年ふりて、水の流いさぎよく、心の底さこそとおしはかれ侍る。昔の事などおもひ出て、

岩がねにながるゝ水も琴のねの昔おぼゆるまらべにハして長明和歌ハ俊惠法師の門弟にして、その奥儀をきはめ、管絃の道はた巧にして、胡渭州の三秘曲をまでうけつたへ、唯識止觀のむねをまなび、老莊の道に達して、名利をいとふ心もとも深く、この方丈の記をもものして世のはかなくあさましきさまを述べ、その

おもひを洩らされしなり。その著はされし書ハ、この書の外に、瑩玉集、無名抄、發心集、四季物語、文字ぐさり等あり。無名抄は、大原退隱のころに物せられたりとおぼしく、四季物語發心集は、外山閑居のはじめつ方の作なるべし。この方丈記は、鎌倉に物せられたつぎの年の三月つごもり頃、物せられたり。さればこの書ハ、一生の著述のをはりといひつべし。其よまれし歌、千載集に一首入り、新古今集以下にハ、數志らす入りたり。家集一卷あり。終に承元五年五月と記して、長明の判あり。長明の歌の人口につたはれる、いと多かれど、いまだ賀茂の氏人たりし時、ある年の八月十五夜に、月くもりおたりければ、

吹拂へわが神山のみねのあらしこハなほざりの秋の空かハ

この歌をよみあげられしに、たゞちに雲晴れて、月ほがらかに出ぬとぞ。かゝるたぐひ猶おほかり。その事迹は、十訓抄、東齋隨筆、隱逸傳、人物志等の書に出たり。されど生誕終焉の年ハ、いづれの記録にも残らざるがごとし。ある書に、久壽元年甲戌に生れ。建保四年丙子八月八日寂す。六十三歳と見ゆ。出所さだかならねど、流水抄に引出たるまゝに、こゝに載せおくなり。

方丈記と名づけられしハ、卷末に閑居のさまを記して、その家のありさま世の常に似ず。ひろさハわづかに方丈、たかさハ七尺のうちなり。とあるに、よりに名づけたる事いちじると。その方丈のおこりハ、惟摩詰、妙義國において、常に一丈四方の室に入りおたるに、ある時維摩やまひに臥したる時、如來文珠師利菩薩をして、

その病をとぶらひ遣はしめ給ひし事あり。そハ維摩經に、爾時長者維摩詰問文珠師利言、仁者遊於無量千萬億阿僧祇國、何等佛土有好上妙功德成就師子之座、文珠師利言、居士東方度三十六恒河沙國、有世界名須彌相、其佛號須彌燈王、今現在彼佛身長八萬四千由旬、其師子座高八萬四千由旬、嚴飾第一、於是長者維摩詰現神通力、即時彼佛遣三萬二千師子之座、高廣嚴淨、來入維摩詰室、云々と見えたり。猶續高僧傳、祖庭事苑等の書にもくはしく見えたりと、くだくしければ、こゝには載せず。

この書を註したる書、我見たるハ、次に載する四部なり。そハ、

- 方丈記諺解 二卷 作者不詳 方丈記頭書 一 山岡元隣
- 方丈記泗說 二 加藤盤齋 方丈記流水抄 二 槇島昭武

この書の前よもいへる如く、閑居の後に、おほくの年頃さまくのうれへにあひたる事を思ひいで、そをかきあつめ、わがおもひを述べられしなり。すなはち安元三年四月廿七日の大火、治承四年四月廿九日の大風、同年六月の遷都、養和年中の飢饉、元暦二年の大地震の事などを、詳に記されれば、記事文の志をりせんに、こよなきたづきなりかし。殊にその文体、雅に偏せむ俗に偏せざれば、今より後のわが國文へ、かゝる書をもとねとして書き出づべきなり。されば紙數いとうすしといへども、深く厚く心をとゞめて、よみ見るべき書といふべし。

明治廿五年七月十七日安房國北條浦の客舎にて

佐々木信綱識

校註方丈記

佐々木信綱註

行く川の流れたえずし  
て云々ながれてゆく川  
の聲聞もなく常々同じ  
やうなれど流るゝ水の  
つぎへつぎへゆきてそ  
れももど流れし水の  
あらざるの意なり  
よどみの水の流れずし  
てたまれる所をいふ  
うたかたの空像ふても  
どりの泡の枕詞なるをや  
がて水の泡をいへり  
かつきえかつ結ぶかつ  
の片一方からの意もて  
あるの指え或は結ぶと  
いはんが如し  
玉志きの都の美麗なる  
家造などの立並へる都  
とつゝ枕詞なり

行く川のながれに絶えずして、志かも本の水にあら  
ず。よどみにうかぶうたかたの、かつ消にかつ結びて、  
ひさしくとゞまることなし。世中にある人とすみか  
ど、またかくのごとし。玉志きの都のうち、むねをな  
らべ、いらかをあらそへる、たかきいやしき人のすま  
ひへ、代々を経てつきせぬものなれど、これをまこと  
かどたづぬれば、むかしありし家へまれなり。あるは  
去年やけ、今年は作り、あるは大家ほろびて、小家とな  
る。住む人もこれにおなじ。どころもかはらず、人もお

いらかき争へる棟瓦の高く大なるがまたたち並ひて争へるやうなるをいふ

いみじへ見し人の三十三人が中云々白居易詩ふ二十年來舊詩卷十人酬和九人無とあり

かりのやどり莊子吾生運旅耳ともありて此世のまぼしの旅居なりといふ意なり

朝顔の露ふことならずハ露をさるじふたとハ花をすみかみたとへて共みはかなきまじをいへり

ほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中、はつかにひとりふたりなり。あしたに死し、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いづ方より來りて、いづ方へか去る。又知らず、かりのやどり、誰が爲にか心をなやまし、何によりてか目をよろこばしむる。そのあるじとすみかど、無常をあらそひさるさま、いはゞ朝顔の露にことならず。あるは露おちて花のこれり。残るといへども、朝日にかれぬ。あるは花のまぼみて、露なほ消えず。消えずといへども、ゆふべをまつことなし。およそ物の心を知れりしより、このかた、四十あまりの春秋を送れるあひだに、世の不思議を見ること、やゝだびぐにたりぬ。

安元三年ハ高倉天皇の年號なりこの年治承と改元す

朱雀門ハ長安南面皇城門是謂朱雀門と拾芥抄に見ゆ京都南端の門也

大極殿ハ朝堂院正殿名云八省院是又謂之最大殿天子臨朝即位諸司先朝所或云號朝堂と拾芥抄に見ゆ

大學寮ハ縦生横二條西南角也と同抄に見ゆ民部省縦西洞院横春日東北角也と同抄に見ゆ樋口富小路ハ東西ふみれとも前抄都のたつみよりとあれハ東富小路なるべし

とくうつりゆくハ火先の早く移りゆくなり一本ふとかくとあるハ方々々の意ふて一本の方まざりぬべし

去に安元三年四月廿八日かどよ、風はげしく吹き、まづかならざりし夜、いぬの時ばかり、都のたつみより、火いできたりて、いぬぬに至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部省などまでうつりて、一夜のほどに塵灰となりけき。火本は樋口富小路とかや、病人をやどせるかりやより、いできたりけるとなん。吹きまよふ風に、とくうつり行くほどに、扇をひろげたるが如く、すゑひろになりぬ。遠き家へ、けぶりむせび、近きあたりへ、ひたすらほのほを地に吹きつけたり。空には灰をふきたてたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風にたへず、吹ききられたる炎、飛ぶがごとくにして、一二町をこぼつゝ、うつりゆく。その中の



うつし心あらんやの現  
心ふてこの世の心はす  
まじとの意なり

七珍万寶かざりなき種  
々の寶物の意なり

邊際をあらすの數へも  
つくされず限もなし  
との意なり

人のいとなき云を假の  
世お俗人のする仕事  
すてはかなく無益な  
る事のみみて感なるわ  
きなるをそれふまた京  
中などお財を費し家を  
造るのあぢなきこと也  
治承高倉天皇の年號也  
中御門京極これも東西  
ふありてこのいづれ  
ともあらす  
辻風旋風ふてつむじ風  
をいふ

人、うつし心あらんや。あるひは烟にむせびてたふれ  
ふし、あるひは炎にまぐれて、たちまち資財をとり出  
るに、およばず。七珍萬寶、さながら灰燼となりけき。そ  
のつひえいくそはくぞ。このたび公卿の家十六焼け  
たり。ましてその外へ、かぞへるすに、およばず。すべ  
て都の中、三分が一におよべりとぞ。男女死ぬるもの  
數千人、馬牛のたぐひ、邊際を知らず。人のいとなき、皆  
おろかなる中じ、さしも危ふき京中の家をつくると  
て、寶をつひやし、心をなやますことへ、すぐれてあぢ  
きなくぞ侍るべき。又治承四年卯月廿九日、中御門京  
極のほどより、大なる辻風おこりて、六條わたりまで、  
いかめしく吹きけること、侍りき。三四町をかけて、吹

けたの屋根のはしむち  
る横木をいふ

檜皮ぶきの檜の木皮  
ふて屋根をよけるをい  
ふ

地獄の業風業風の永劫  
ふく風ふて地獄の  
常ふいかめしき風の吹  
くなり

かたはづけるかたはも  
のみなる意なり片輪片  
羽翹説あり

さまはるまゝに、その中にこもれる家ども、大なるも  
小さきも、一つとしてやぶれざるのなし。さながらひ  
られたふれたるもあり。けたはしらばかりのこれる  
もあり。また門の上を吹きはなちて、四五町がほどに  
おき、また垣をふきはらひて、隣とひとつになせり。い  
はんや家のうちのたから、數をつくして空にあらり、  
檜皮ぶき板のたぐひ、冬の木の葉の風にみだるゝが  
ごとし。塵を烟のごとく吹きたてたれば、すべて目も  
見えず。おびたゞしく鳴りとよむ音に、ものいふ聲も  
きこえず。かの地獄の業風なりとも、かばかりにこそ  
ほどぞおぼはける。家の損亡するのみならず、これを  
とり、つくろふあひだに、身をそこなひてかたはづけ

ざるべき物のさとし  
 何事かあるべき前兆な  
 るべしと也としし祥  
 の意なり  
 都うつり平清盛の意を  
 以て攝津國福原を遷都  
 ありしをいふされど程  
 なく平安城を復り遷ら  
 せ給ひきこゝへそのま  
 まをかけるなり  
 この京のはじめ云々桓  
 武天皇延暦三年奈良よ  
 り山城國長岡を遷り同  
 十三年長岡より平安城  
 を遷れるなりこゝへ嵯  
 峨天皇の時といへるハ  
 いかんぞや  
 ことなるゆゑなくして  
 特別ふこれといふべき  
 理由なくしての意なり

るもの數を知らず。この風、ひつじさるのかたにうつ  
 りゆきて、おほくの人のなげきをなせり。辻風の常に  
 吹くものなれど、かゝることやある。たゞ事にあら  
 ず、さるべききのゝさとしかなどぞ、うたがひ侍りし。  
 又おなじ年の水無月の頃、にはかたに都うつり侍りき。  
 いと思ひの外なりしことなり。おほかたこの京のは  
 じめを聞けば、嵯峨天皇の御時、都とさだまりにける  
 より後、すでに數百歳を経たり。ことなるゆゑなく、  
 たやすくあらたまるべくもあらねば、これを世の人、  
 たやすくからずうれへあへるさま、ことわりにも過ぎ  
 たり。されどかくいふかひなくて、御門よりはじめた  
 てまつりて、大臣公卿、ことごとく攝津國難波の京に

故郷のすなはち平安  
 京をいふ

世みあまされて、世の  
 中を用ひられずしての  
 意なり  
 期する所なきハ目的な  
 きをいふ

淀川かびの家を毀  
 ちて川より福原の方へ  
 運ぶをいふ  
 牛車を用とする人なし  
 ハ牛車ハ三位以上の乗  
 物にて又聽されねば官  
 内に入る事もならぬ故  
 ち却りて手かるき馬の  
 のみ乗るとなり平氏武  
 門より出て勢盛なりし  
 かの皆其風を慕ひまね  
 びしなるべし  
 庄園ハ權門の私の所領  
 をいふ西南の地のみを

遷りたまひぬ。世につかふるほどの人、誰かひとり故  
 郷にのこりをらん。つかさくらおにもひをかけ、主  
 君のかけをたのむほどの人は、一日なりとも、とくう  
 つらんとはげみあへり。時をうしなひ、世にあまされ  
 て、期する所なきもの、うれへながらとまりをり、軒  
 をあらそひし人のすまひ、日を経つゝ、あれゆき、家ハ  
 こぼたれて淀川にうかび、地は目の前に島となる。人  
 の心みなあらたまりて、馬鞍をのみおもくす。牛車を  
 用とする人なし、西南海の所領をのみねがひ、東北國  
 の庄園をばこのます。その時、おのづから事のたより  
 ありて、攝津國今の京に至れり。所のありさまを見る  
 に、その地ほど狭くて、條里をわるにたらず。北は山に

願ふに都近くて便よ  
く東北の源家お屬して  
西南の平氏の所領多け  
れなり  
條里京中の町のわりか  
たみて町十六を坊とい  
ひ坊四を條といふ  
木の丸殿の土佐國土佐  
郡朝倉郷ありて天智  
天皇また春宮と申しけ  
る時齊明天皇お遣ひて  
おはしける時の行宮な  
り丸木の黒木みて作れ  
る故木丸殿といふ

衣冠の公卿の正服めて  
束帯をいふ布衣の狩衣  
などの類なり直垂は武  
官の着るものなり  
都のてぶりの都の風俗  
なり

そひて高く、南は海に近くて下れり。波の音つねにか  
まびすしくて、潮風こどにはげしく、内裏は山の中な  
れば、かの木の丸殿もかくやど、なか／＼やうかはり  
て、優なるかたも侍りき。日々にこぼちて、川もせきあ  
へず、はこびくたす家、いづくに作れるにかあらん。  
なほむなしき地へ多く造れる屋へすくなし。故郷へ  
すでにあれば、新都へいまだ成らず。ありとしある人  
へ、みな浮雲のおもひをなせり。もとよりこの所を  
れるものは、地をうしなひてうれへ、今うつり住む人  
は、土木のわづらひあることを歎く。道のほとりを見  
れば、車に乗るべきへ馬も乗り、衣冠布衣なるべきは、  
多く直垂を着たり。都のてぶりたちまちにあらたま

民のうれへつひふ云々  
民の心配せしかひあり  
てとなり

御殿の茅をふき煙のた  
しき云々仁徳天皇の  
御事を申せるなるへし

りて、たゞひなびたる武士にことならず。これは世の  
みだるゝ瑞相とか聞されけるも、志らく、日を経つゝ、  
世の中うきたちて、人の心もをさまらす。民のうれへ、  
つひにむなしからざりければ、同じき年の冬、なほこ  
の京にかへり給ひにき。されどあぼちわたせりし家  
ども、はいかになりけるにか。ことごとくもとのやう  
にしも造らず。ほのかに傳へ聞くよ、いよしへのかこ  
こき御代に、あはれみをもて國を治めたまふ。すな  
はち御殿に茅をふきて、軒をだれもとのへす。煙の  
ども、しきを見たまふ時、かぎりあるみつぎものを  
さへ免されき。これ民をめぐみ、世をたすけたまふに  
よりてなり。今の世の中のありさま、むかしにぞら

養和の安徳天皇の年號なり

ぞめきつさわざの意なり

さまぐの御祈はじま  
り云々朝廷ふても世の  
中をなほさんとして御祈  
禱をも御修法をもさま  
さま行はせられしかば  
となり

京のなりひ云々米穀材  
木薪等の類も皆田舎よ  
り京へ持出るを頼める  
ふとの意なり

へて知りぬべし。又養和の頃かどよ、久しくなりて、た  
しかにもおぼえず。二年があひだ、世の中飢渴して、あ  
さましきこと侍りき。あるひは春夏日てり、あるひは  
秋冬大風大水など、よからぬ事どもうちつゞきて、五  
穀ことぐくみのらず。むなく春耕し、夏植うるい  
どなみのみありて、秋刈り、冬收むるぞめきつなし。こ  
れによりて、國々の民、あるひは地を捨て、塚をいで、  
あるひは家を捨て、山に住む。さまぐの御祈はじ  
まりて、なべてならぬ法ども行はるれども、さらばそ  
の志るしなし。京のならひ、何わざにつけても、みなも  
どの田舎をこそたのめるに、たえてのぼるものなけ  
れば、さのみや、みさをもつくりあへん。念じわびつ

このみやハ云々もはや  
田舎の類まれなりし  
かこれまでの如く正  
直固く田舎より上る  
を待ちあへず堪へかね  
てとの意なり

目見たつるハ寶物など  
み目をつけて見る者も  
なしとの意也

あまさへえやみ云々饑  
饉の上の疫病さへ流行  
して前年よりは一層世  
の人次第に死ふゆきて  
跡方もなしと也

さまぐの寶物、かたはじより捨つるがごとくす  
れども、さらに目みたつる人もなし。たまぐかふる  
ものは、金をかろくし、粟をおもくす。乞食道のほとり  
におほくうれへかなし。ぶ聲、耳に満てり。前の年かく  
のどとく、辛くして暮れぬ。明くる年ハ、たちなほるべ  
きかどれもふほどに、あまさへえやみうちをひて、ま  
さるやうにあとかたなし。世の人みな飢え死にけれ  
ば、日を経つゝきはまりゆくさま、少水の魚のたどへ  
にかなへり。はては笠うち着、足ひきつゝ、み身よろ  
しき姿したる者、ひたすら家ごとくに乞ひありく。かく  
わびしれたる者ども、ありくかど見れば、すなはちた  
ふれふしぬ。ついひちのつら路のほとりたう急死ぬ

ついでづのつちの築土  
みて土みて築きたる塀  
の面の意なり  
かはりゆくありさまの  
屍骸のいされなきて  
あさましく成ゆべき  
川原などは云々は行き  
だふれたる死人の満ち  
くすきもなきをい  
ふ  
薪さへ乏しく云々京人  
の頼める仙人なども薪  
とする力なくて京も持出  
る事もせざれば京中は  
次第に薪さへ乏しくな  
りゆくとの意なり  
薪の中丹つき云々佛  
儀堂舎などをこぼちて  
薪とする故中丹は丹  
塗の丹つきであるもあ  
り金銀の箔などのこれ  
るもありとなり

るたぐひは、數も知らず。とりすつるわざもなければ、  
くさき香世界にみちく／＼て、かはりゆくかたちあり  
さま、目もあてられぬ事おほかり。いはんや川原など  
には、馬車のゆきちがふ道だにもなし。あやしきまづ  
山がつも、力つきて、薪さへともしくなりゆけば、頼む  
かたなき人は、みづから家をこぼちて、市にいで、こ  
れを賣るに、一人がもちて出たるあたひ、なほ一日が  
命を、さゝふるに、及ばずとぞ。あやしき事ハ、かゝ  
る薪の中に、丹つき、白がね、黄金の箔など、ところ／＼  
につきて見ゆる木のわれ、あひまじれり。これをたづ  
ぬれば、すべき方なきもの、古寺にいたりて、佛をぬ  
すみ、堂の物の具をやぶりとりて、わりくだけるなり。

濁惡の世ハ汚濁の惡世  
の意なり  
さりがたき男女など云  
々男おまれ女おまれわ  
が大切お思ふ事の深き  
方は思はるゝ方よりも  
先だちて死ねば已の乞  
ひ得たる物をもいとほ  
しく思ふ人ふ譲りて喰  
はする故なりとなり

されハ親子あるもの云  
々男女の中おてだと思  
ふかたまづ死ねなれば  
人の親の心ハやみなら  
ねど子を思ふ道迷ふ  
ハ常なれば定まりて親  
まづ死ねとなり  
大藏卿隆曉法印大藏卿  
ハよび名なるべし法印  
は僧官なり隆曉の傳記  
詳ならず  
聖をあまたかたらひて  
ハ多くの聖傳お相談し  
あひての意なり

濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心うきわざをな  
ん見侍りし。又いとあはれなる事侍りき。さりがたき  
男女などもちたるものは、其おもひまさりて深きハ、  
かならずさきだちて死す。そのゆゑハ、わが身をばつ  
ぎになして、男にもあれ、女にもあれ、いたはしく思ふ  
かたに、たま／＼乞ひ得たる物を、まづゆづるにより  
てなり。されば親子あるものハ、さだまれるならひに  
て、親をさきだちて死よける。父母が命つきて臥せる  
を知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひつき  
つゝ、ふせるなどもありけり。仁和寺よ、慈尊院の大藏  
卿隆曉法印といふ人、かくしつゝ、數知らず死ぬること  
を、かなしみて、聖をあまたかたらひつゝ、その首の

阿字をかきてハ八幡田  
中下阿字一刀生死斷涅  
槃亦斷とありその阿の  
字を額み書きつけて成  
佛の結縁をなさしめし  
なり

川原は鴨川まで左京  
極の外あり  
西の京昔は京城を朱雀  
大路より左右みわかち  
右を西の京ともいへり  
さて西の京は早く衰へ  
ふしかは此頃は京の外  
のやうな邊地となれり  
しなり

元暦は後鳥羽天皇の年  
號なり  
おほなみの大地震なり

見ゆるごとし額に阿字を書きて、縁を結ばしむるむ  
ぎをなんせられける。その人數を知らんとて、四五兩  
月がほど數へたりければ、京の中、一條より南、九條よ  
り、北京より西、朱雀より東、道のほとりよある頭、  
すべて四万二千三百餘なんありける。いはんや、その  
前後も死ぬるものも多く、川原、白川、西の京、もろく  
の邊地などを加へていはゞ、際限もあるべからず。い  
かよいはんや、諸國七道をや、近くハ崇徳院の御位の  
時、長承の頃かどよ、かゝるためしハありけりと聞け  
ど、その世のありさまハ知らず。まのあたりいとめづ  
らかに、悲しかりし事なり。又元暦二年の頃、おほなみ  
ふること侍りき。そのさま、世の常ならず。山ハ崩れて

またからずは全たきま  
のなごとなり

うちひしげなんのうち  
ひしがれ潰されんの意  
なり

その中みハ此地震の最  
中なり

川をうづみ、海ハかたぶきて陸をひたせり。土裂けて  
水湧き出で、いははわかれて谷まろび入り、渚こぐ船  
ハ波にたゞよひ、道ゆく駒ハ足のたちどをまどはせ  
り。いはんや、都のほとりよハ在々所々、堂舎塔廟、ひと  
つとしてまたからず。あるひハくづれ。或ハたふれぬ  
るあひだ、塵灰たちあがりて、さかりなる煙のごとし。  
地の震ハ家のやぶるゝ音、いかづちよことならず。家  
の中よをれば、たちまちにうちひしげなんとす。走り  
出れば、又地われさく。羽なければ、空へもあがるべか  
らず。龍ならねバ、雲よものぼらん事かたし。おそれの  
中よ恐るべかりけるハ、たゞ地震なりけりとぞ、おほ  
え侍りし。其中に、ある武士の、ひとり子の、六七ばかり

つひひぢのぢはひひ土  
屏の瓦などの屋根なり  
小家をつくりて、今の  
世にも幼き子どもの木  
くれなを積みて家な  
との形をつくりて遊ぶ  
ことある類なるへし  
あとなし事あとかたも  
なくつまらぬ戯事の意  
なり

いとほしく、氣の毒に  
の意なり

一日ませの隔日なり

に侍りしが、ついひぢのねほひの下に、小家を作りて、  
はかなげなるあとなし事をして、あそび侍りしが、俄  
にくづれうめられて、あとかたなく、ひらにうちひさ  
がれて、二つの目など、一寸ばかりうち出されたるを、  
父母かへて、聲もをしまし、悲しみあひて侍りしこ  
ろ、あはれにかなしく見侍りしか。子のかなしみは、た  
げきものも、耻をわすれけりとおぼえて、いとほしく、  
ことわりかなとぞ見侍りしか。かくおびたしく震る  
こと、あはれにやみはしかども、そのなむり、まば  
く絶えず、世のつねにおどろくほどの地震、二三十  
度ふらぬ日々なし。十日廿日過ぎにしかば、やうく  
まどほになりて、或は四五度も、しほ一日ませ、二三日

四大種の地水火風をい

備後文徳天皇の年號  
なり齊衡二年五月五日  
の地震をいふなるへし  
東大寺の奈良七六寺の  
一ふて聖武天皇神龜五  
年ふ創立せり

佛のまゝし、佛像の頭  
をいふみとし、もと御  
髮なるを轉りて頭をも  
いへり

すなはち人皆云々人心  
のはかなきをいふ其災  
の當時こそ世のあぢき  
なきをいひ少しの親  
して食欲心も薄くなる  
かと思わしが程程れい  
又もとの心ふ立かへり  
てさる事、口のはふも  
かけずなるのあさまし  
き事よとなり

すなはち世のありふくき  
事云々まづ四大種の災  
を記さして人の上との

に一度など、おほかたそのなむり、三月ばかりや侍りけ  
ん。四大種の中、水火風、つねに害をなせど、大地よ  
いたりて、ことなる變をなさず。むかし齊衡の頃かど  
よ、大なるふりて、東大寺の佛のみぐし落ちなどして、  
いみじき事ども侍りけれど、なほこのたびに、まか  
ずとぞ。すなはち人皆あぢきなき事を述べて、いさよ  
か心のよむりもうすらぐかど見しほど、よ月日かさ  
なり、年こほしかば、後は言の葉に掛けて、いひ出る人  
だよなし。すべて世のありにくき事、わが身とすみか  
この、はかなくあだなるさま、又かくの如し。いはんや、  
所により、身のほどにまたがひて、心をなやますこと  
ハ、あげて數ふべからず、もしおのづから身かなはず

みおもふへからず世中  
のすべてかやうふ安堵  
せられぬ物ぞおのが身  
も栖家も同然おはかな  
きものなれはそれお着  
するの感なる事なりと  
の意なり

いはんや所ふより云々  
これより住む場所の閑  
静なる所おつてべき事  
をいへり

深くよろこぶ事ハあれ  
とも云々權門のひきを  
うける時の身富み位  
高く上る等の悦ハあれ  
と何かおつけて憚る事  
のみ多く心のまゝなら  
ねハ樂ハつてす能ハず  
となり

すばき姿見すばらしき  
風体の意なり  
近く炎上するハ近く火  
災などのある時となり

して權門のかたはらに居るものは深くよろこぶ事  
ハあれども大に樂しむにあたはずなげきある時も  
聲をあげて泣くことなし進退やすからず立居につ  
けて恐れおのゝくさまたとへば雀の鷹の巢にちか  
づけるがごとしもし貧しくして富める家の隣にを  
るものハ朝夕すばき姿を耻ぢてへつらひつゝ出で  
いり妻子僮僕のうらやめるさま見るにも富める家  
の人のないがしろなるけしきを聞くにも心念々に  
動きて時としてやすらかならずもしせばき地にな  
れば近く炎上する時その害をのがるゝ事なしもし  
邊地にあれば往反わづらひおほく盜賊の難はなれ  
がたし又いきほひあるものは貪欲ふかくひとり身

賢あれハ云々莊子に多  
男子則多懼富則多事壽  
則多辱是三者非所養德  
也とあるふもことごと  
てかけるなるへし

はこむハ鳥の子を羽  
ふふくみて養ふをいへ  
るがもとめてうつくし  
み愛する意なり

玉ゆらハ玉のゆらく  
するをいふがもとめて  
志はしの間をいふ

我身ハ長明自身をいふ  
父ハ長繼祖父委長代々  
山城國賀茂社の氏入ふ  
て皆福宜となれり

なるものは人にかろしめらる賢あればおそれおほ  
く貧しければなげき切なり人をたのめば身他のや  
つこととなり人をはこくめば心恩愛につかはる世に  
またがへハ身くるし又またがはねハ狂へるよ似た  
りいづれの所を志めいかなるわざをしてか志はし  
もこの身をやどし玉ゆらも心をなくさむべきわが  
身父かたの祖母の家を傳へてひさしくかの所に住  
むその後縁かけ身おどろへて忍ぶかたぐ志げか  
りしがばつひよあどとむる事を得ずして三十余よ  
して更にわが心とひとつの庵を結ぶこれをありし  
すまひよなずらふるに十分が一なりたゞ居屋はか  
りをかまへてはかぐじくハ屋をつくるにおよび



白波のちそれ賊難をいふ後漢孝順帝の時西河の白波谷ふ郭泰の反せしより盗人の異名ふよべり

あらぬ世一本ふあらぬ世とありてわが思ふふまかせぬ世を忍びて経過せしとなり  
みじかき運と我身の不運なるをいふ

執の執着の心なり

露消えかたふ云々年老て死期近くなれるを云

ず。わづかよついでひちをつけりといへども門たつるよたづきなし。竹を柱として車やどりとせり。雪ふり風吹くごとけ、あやふからずしもあらず。所へ川原近ければ、水の難もふかく、白波のおそれもさわがし。すべてあらぬ世を念じ過ぐしつゝ、心をなやませること、三十余年なり。そのあひだ、折々のたがひめよ、おのづからみじかき運をさとりぬ。すなはち五十の春をむかへて、家を出で世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず。何につけてか執をどめん。空しく大原山の雲に臥して、また五かへりの春秋をなん經にける。あゝに六十の露消えがたけにおよびて、さらに末葉のやどりを結

末葉のやどりの餘生のいくはくもなき程に住むべき宿を結ひたりとなり

をりくみこ、ハ次第ふといはんか如意なり  
方丈の壹丈四方なるをいふ

所を思ひ定めざるが故に、必こゝへ一生涯住むべしと定めず、あつ時ついつくにも移らんと思ふ故なり  
土居の土壁をいふ  
打覆の屋根をいふ

日かくしの庇をいふ  
竹のすのこの竹の椽側なり

べることあり。いはゞ旅人の、一夜の宿をつくり、老たるかひこの藪をいとなむがごとし。これを中頃のすみかになすらふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふほどに、齡の年々にかたぶき、すみかへのりくりに狭し。その家のありさま、世の常ならず。廣さへわづかに方丈、高さへ七尺ばかりなり。所を思ひさためざるが故に、地を志めて作らず。土居をくみ、打覆をふきて、つぎめごとけ、かけがねをかけたなり。もし心にかなはぬ事あらば、やすく外に移さんかためなり。その改め作る時、いくばくのわづらひかある。つむ所わづかに二兩あり。車の力をむくゆる外には、更け他の用途いらす。いま日野山の奥に跡をかくして後、南

阿彌陀佛の梵語にて水をいふは佛の水を供へ又草木の花などを折へて奉る爲に用ふる棚をいふ  
 阿彌陀十三佛のうちなり十三佛の不動釋迦文殊普賢地藏彌勒樂師觀音勢至阿彌陀阿闍世虚空藏をいふ  
 三四合身と推さざるを合と云三組四組の意也  
 往生要集惠心僧都の作れる書なり  
 抄物にかき物をいふ  
 等十三絃にて今いふ琴なり  
 琵琶の四絃なるをいふをり琴つを琵琶の今の世少三味線などをつぎ棹小作の類なり狭き所みおくふ便よけれ也  
 藤のははる藤の穂のたけたるをいふ山がつなだのまき物とする物もてむろくろまきもの也  
 つかなみの藤の敷物を

に假の日かくしをさし出して竹のすのこを敷き、その西に阿彌陀棚を作り、うちには西の垣をへて阿彌陀の画像を安置したてまつりて、落日をうけて、眉間のひかりとす。かの帳のとびらに普賢ならびに不動の像をかけたなり。北の障子の上にちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌、管絃、往生要集、ごときの抄物を入れたり。かたはらに筆、琵琶、これのくく一張をたつ。いはゆるをり琴、つぎ琵琶、これなり。東にそへて藤のほごろをまき、つかなみをまきて、夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕のかたにすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をまめて、あばらなるひめ垣

いふ一本つかなみをあきの七字なし  
 ひめ垣の低くして小まき垣をいふ  
 つま木小枝の薪をいふ  
 正木のかつら扶芳藤をいふ  
 谷しげ、れとの谷多くして四方取圍みてまれの意なり  
 觀念涅槃寂滅を念する事ふて即西方淨土を望みて佛心を堅固する便ありと也  
 紫雲の如くハ佛涅槃の時紫雲の棚引しといへハ藤の花を紫の雲よそへて往生をまつ心也  
 時鳥を聞き云々時鳥の死出の田長ともいひて冥土ふる鳥なりといへハかくいへり  
 空蟬の世ハはかなき世の意なり  
 讀經まめならざる時ハ心より眞實に讀經せんと思はぬ時なり

をかこひて園とす。すなはち、もろくの薬草を栽ゑたり。假の庵のありさま、かくのごとし。その所のごまをいはは、南にかけひあり。岩をたゝみて水をためたり。林の軒ちかければ、つま木を拾ふにともしからず。名を外山といふ。正木のかつら跡をうづめり。谷まげれど、西へ晴れたり。觀念のたよりなきよしもあらず。春ハ藤浪を見る。紫雲のごとくして、西方にほふ。時鳥を聞きかたらふごとく、死出の山路をちぎる。秋ハひぐらしの聲耳よみてり。空蟬の世をかなしぶと聞ゆ。冬ハ雪をあはれぶ。つもり消ゆるさま、罪障よたとへつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時ハ、みづから休み、みづからおこたるに妨ぐる人もな

口業くわくごふの事正しから  
 破るやぶて多言たごんせされ  
 跡あとの白浪しろなみ身をよする  
 ひよせたる朝あさの眼前がんぜん  
 の景色けしきおつけてかの満  
 沙彌まんじがよめる歌の風情  
 を思おもふと也満まん沙彌じの  
 歌拾遺集しやくいしふ世中よちゆうを何なにふ  
 たとへん朝あさはらけこそ  
 ゆき舟ふねの跡あとの白浪しろなみ万葉  
 集まんやふの三句さんく朝あさひらき五  
 句ごく跡あとなきがこころあり  
 桂かへの風撥かぜはらをならす夕ゆふの  
 琵琶びわを弾ひいて思おもをやる  
 夕ゆふの唐たうの白樂はくらく天我朝てんがてん  
 の源經信げんけいしんの跡あとを忍しのぶと  
 の意いなり  
 薄陽うすひかりの江えの白樂はくらく天馬てんま江  
 郡えのりむらの司馬しりまお駈かせられた  
 る時薄陽うすひかりの江えの舟ふねを浮  
 へて琵琶びわを弾ひたる事ことあり  
 りて琵琶びわ行ぎやうと云い詩しあり  
 源都督げんととくの桂かへ中納言ちゆうなごん經信けいしん  
 脚あしなり故ゆゑありて太宰たいさい権

く、また耻はづづべき友とももなし。ことさらことさらに無言むごんをせされ  
 ども、ひとり居ゐれば、口業くわくごふををさめつべし。かならず禁かぎ  
 戒かいをまもるとしもなければ、境界きょうがいなければ、何なによつ  
 けてかやふらん。もし跡あとの志しら浪なみよ、身をよするあし  
 たよの岡おかのやよ行きかふ船ふねをながめて、満沙彌まんじが風  
 情せいをぬすみ、もし桂かへの風撥かぜはらをならす夕ゆふの薄陽うすひかりの江  
 をおもひやりて、源都督げんととくのながれをならふ。もし餘興よこがた  
 あれば、志しばく松まつのひゞきに、秋風あきかぜの樂がきをたぐへ、水  
 の音ねに、流泉りゅうせんの曲まがをあやつる。藝ぎへこれつたなければ、  
 人の耳みみをよろこばしめんとにもあらず。ひとり調しらべべ、  
 ひどり詠よみじて、みづから心をやしなふばかりなり。ま  
 た麓ふもとにひとつの柴しばの庵いほあり。すなはち、この山守やまもりが居

帥すしお駈かせらる琵琶びわの名  
 人ひとみて別業べつごふ桂かへの里さとお在  
 しか、此流このりゅうを桂流かへりゅうと云  
 秋風あきかぜの樂がきをたぐへ、水  
 曲まがの名ななりたぐへは松  
 風の音ねお琴ことを調しらべ合あす  
 るなり  
 流泉りゅうせんの曲まがをあやつる、  
 琵琶びわの秘曲ひまが流泉りゅうせん啄木たくもく  
 といふありあやつる、  
 流水りゅうすいの音ねお琵琶びわを弾ひじ  
 合あする也  
 山守やまもりは山の番ばんをする者  
 をいふ  
 たれを友ともとし、その小  
 童こどもを友ともとする也  
 つばな、ちばな、なみ、て淺  
 茅かやの穂ほをいふ  
 ぬかこは響ひびの實みおて  
 むかこともいふ  
 すそわの田たおわのわの浦  
 回まわり入いたる所ところを云  
 田たおわの田たの水みづある所ところを  
 て只田ただたをいふ  
 はくみ、刈かりたる跡あとお稻  
 穂ほの落おたるを拾ひろひて食  
 物ものを作るをいふ俗ゆおは

る所ところなり。かしてこに小童こどもあり。時々ときとき來きりてあひ訪まふ。も  
 しつれぐなる時ときへ、これを友ともとしてあそびありく。  
 かれハ十六歳じゅうろくさい、われは六十、その齡としことの外ほかなれど、心  
 をなぐさむる事ことへこれれなし。或あるハつばなをぬき、岩  
 なしをとる。又またぬかこをもり、芹せりを摘つむ。或あるハすそわの  
 田たおわにおりて、落穂おちほを拾ひろひて、ほぐみを作る。もし日ひう  
 ららかなれば、嶺たかねによちのぼりて、はるか故郷こきやうの空  
 を望のぞみ、木幡山きわたやま、伏見ふし見の里さと、鳥羽とりは、羽束師はつたしを見る。勝地かちちは主  
 なければ、心をなぐさむるにさはりなし。あゆみわづ  
 らひなく、志遠しゑんくいたる時ときへ、これより嶺たかねつゞき、すみ  
 山やまを越こへ、笠取かさとりを過ぎて、或あるは岩間いわままうで、或あるは石山いしやま  
 を拜まがむ。もしは田上川たがしがわをわたりて、猿丸さるまる大夫だうふが墓はかをた

かけとて刈收の祝ふ萩の餅なと作るハ此はくみの轉れるなるへし  
 木輪山伏見鳥羽羽東師皆山城の名所なり  
 勝地は主なればハ明詠集ハ白居易勝地本来無定主大都山陽愛山人とあり  
 ナミ山笠取皆日野山のつゝきみて山城なり  
 岩間山城さて本寺觀音なり  
 石山栗津原田上川みな近江國也  
 蟬丸翁の跡無名抄ハ會坂の剛の明神と申すハ昔の蟬丸のかのわらやの跡を失はずしてそこを神となりてすみ給ふなるへし云々とあり  
 猿丸太夫か鼻又無名抄ハある人たなかみの下ふそづかといふ所ありそこハ猿丸か鼻あり庄の境さてその券ふかきのせたれハみな人知れりとあり

づね、歸るさにハ折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもどめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつハ佛よたてまつり、かつは家づとにす。もし夜去づかなれば、窓の月に古人を志のび、猿さるの聲に袖をうるほす。草むらの螢ハ、どほく眞木の鳥のかゞり火にまがひ、曉の雨ハ、たのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろくゝとなくを聞きて、父か母かどうたがひ、峯のかせぎの近くなれたるにつけても、世よ遠さかる程を知る。或は埋うめ火をかきおこして、老のねざめの友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれふにつけても、山中の景氣、折につけて、つくることなし。いはんや深く思ひ、深く知れらん人のためよハ、これよこもかざる

山鳥のほろくゝとなく云々玉葉集おほろくゝとなく山鳥のなく聲きけハ父かと思ふ母かと思ふとあり  
 かせぎハ鹿をいふ西行法師家集ハ山深み馴るるかせぎのけ近きハ世み遠さかる程を知らるる又山深みけ近き鳥の聲ハせでもの恐しきふくろふの聲などあり  
 いはんや深く思ひ云々まして佛道の事を深く思ひ知れらん人のこれらふかざらず閑靜ハして觀念修行するハ便よき事多かるへしとなり  
 さからさまは當分の事暫くの閑などの意にてかりそめといふに同じ苦むせりの苦生えたりとなり  
 都をきりば都の機子を尋ねればとなり  
 程せばしどいへどもハ家只方丈ふして甚狭く

べからず。大かた、此所よ住みそめし時ハ、あからさまと思ひしかど、今すてよ五とせを經たり。假の菴も、やとふる屋となりて、軒よは朽葉ふかく、土居よ苔むせり。おのづから事のたよりよ、都を聞けば、この山よこもり居て後、やんごとなき人のかくれ給へるも、あまた聞ゆ。まして數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。たびくゝの炎上えんじやうよ、ほろびたる家、又いくそばくぞ。たゞ假の菴のみ、のどけくしておそれなし。程せばしどいへども、夜臥よふす床あり。晝居ひるる座あり。一身をやどすよ不足なし。がうなハちひさき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさこハ荒磯あらいそよ居る。すなはち人をおそるゝがゆゑなり。われ又かくのこ

ハあれど、也  
がうなハ寄生虫にて他  
の貝の空殻宿る虫也  
身を知り世を知れハ  
我身のはかなき程此世  
のちやふき事を知れる  
故ハ蓮花を願はず人中  
に交らずしてがうなみ  
さじの如くすとなり

ねんごろなるを先とす  
ハこハへつちひおも  
ねるやうの意にねんご  
ろといふを用ひたり  
情あるハ慈悲心のある  
をいひ直なるハ正直な  
るをいふ

とし身を知り世を知れハ願はずまじらはず只志  
づかなるを望とし愁なきを樂とすすべて世の人の  
すみかを作るならひかならずしも身のためよハせ  
ず或ハ妻子眷屬のためよ造り或ハ親昵朋友のため  
よ作る或ハ主君師匠および財寶馬牛のためよさへ  
これを作るわれ今身のためよ結べり人のためよ作  
らず故いかよとなれば今の世のならひこの身のも  
りさまともなふべき人もなく頼むべきやつともな  
したとひ廣く作れりとも誰をかやどし誰をかすゑ  
んそれ人の友なるものハ富めるをたふとびねんご  
ろなるを先とすかならずしも情あると直なるとを  
ハ愛せずたゞ糸竹管絃を友とせんよハ志かず人の

絲竹管絃ハ琴笛の類を  
いふ

更ふはびくみ云々いか  
み奴隷なりともあまり  
み辛く使ハん事をいと  
ほしく思ひて慈悲をか  
けて使ハん却てそをい  
とひていか程辛く使ハ  
るハ賞の多からん事  
を望みて心安く閑なる  
をハ願はずとなり  
唯我身を云々されハ却  
て奴隷の爲み我心を勞  
し役せらるハやうなれ  
ハ職ろ心を勞せずして  
我身を役することなき  
れとの志なり  
たゆからずしもあらね  
とハ身を勞すれハ骨も  
をれてたる事もあれ  
どの志なり  
手の奴足の乗物心を主  
とし手を奴として使ハ  
足を乗物としてあるけ  
ハ實ハ心のまなりと  
なり

奴たるものハ賞罰のはなはだしきをかへりみ恩願  
のあつきを重くす更よはびくみあはれぶといへど  
も安く閑なるをばねがはずたゞわが身を奴婢とす  
るにハ志かずもしなすべき事あればすなはちおの  
づから身をつかふたゆからずともあらねど人を志  
たがへ人をかへりみるよりハやすしもしありくべ  
き事あればみづからあゆむくることいへども馬鞍  
牛車と心をなやますよハ似ず今一身をわかちて二  
つの用をなす手の奴足の乗物よくわが心にかなへ  
り心また身の苦しみを知れば苦しむ時ハやすめつ  
まめなる時ハつかふつかふとてもたびくすぐさ  
ずものうじとても心を動す事なしいかたいはんや

藤の衣の藤かつらふて  
織れる衣ふて粗末なる  
衣をいふ

かて乏しければ云々か  
ての糧みて食物をいふ  
さて食物の充分みなけ  
れ粗末なるを食へど  
も佳肴珍味の如く思ふ  
となり

怨もなき怨もなし云々  
論語云天不怨人尤ま  
た死生有命富貴在天  
とあり

身を浮雲みならずへ  
の浮雲のたよひつゝ  
あるかと思へる消えゆ  
く如くなるに身を思ひ  
なしてとなり

常にありき常に働くは養生なるべし。何ぞいたづら  
にやすみをらん。人を苦しめ、人をなやますは、又罪業  
なり。いかゞ他の力をかるべき。衣食のたぐひまた同  
じ。藤の衣麻の衾得るに去たがひて肌をかくし、野べ  
のつばな、峯の木の實、わづかに命をつぐばかりなり。  
人にまじろはされば、姿を耻づる悔もなし。かて乏し  
ければ、おろそかなれども、なほ味をあまくす。そべて  
かやうのたのしみ、富める人に對していふにあら  
ず。たゞわが身一つにとりて、昔と今とを、たくらぶる  
ばかりなり。おほかた、世を遁れ、身を捨てしより、怨も  
なく、恐もなし。命は天運にまかせて、惜まず。厭はず。身  
をば浮雲になすらへて、頼まず。まだとせず。一期の

まだとせずはまたし  
の未物の充分ならぬを  
いひて此身は明日死ぬ  
とも又の出世をせぬと  
も是を不足かましく思  
はぬとの意なり

三界の欲界色界無色界  
にて佛の此世をわかち  
ていへるなりさて世界  
の我一心にて生活する  
ものぞとなり

他の俗塵に著する事を  
あはれふは他の人の世  
俗紅塵に執着して更に  
脱離の心なきを憫ふと  
この意なり

分野の境界持場といは  
んが如し天の廿八宿を  
方角によりて國々にわ  
りあて、そこ何の國  
の持場にたたる星と定  
めいへるかもとなり

たのしびのうたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望  
のをりくの美景に残り。それ三界のたゞ心一つ  
なり。心もし安からず、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓  
閣も望なし。今さびしきすまひ、一間の菴みづからこ  
れを愛す。おのづから都へ出て、乞食となれる事を  
恥づといへども、歸りてこゝに居る時、他の俗塵よ  
着することあはれぶ。もし人、このいへる事をうた  
がはゞ、魚と鳥との分野を見よ。魚は水よあかず。魚よ  
あらざれば、その心をいかで知らん。鳥、林をねが  
ふ。鳥よあらざれば、その心を知らず。閑居の氣味も、ま  
たかくの如し。住まずして誰かさとりん。そもく、一  
期の月影かたぶきて、餘算山の端よ近し。たちまちよ

三途の闇に向はん時云々今死なんとする時に至り彼世に至りて何業をして佛にもにかたことをせんやとなり事ふふれて執心なかれの金剛經に如來常設汝等比丘知我說法如筏喻者法尚應捨何況非法とあるなどの意なり今草の菴を愛するも云々今この閑居をも草菴をも愛するも猶罪障を免れざるべしとなり世をのかれて云々ありる晩平旦の心を澄してみづから誦實せしなり淨名居士天竺の維摩詰の事にて方丈の室によく行を修めし人なり周梨槃持は釋迦の弟子よく物を忘れし人なり貧賤のむくい云々は貧賤なるためにそれを苦しみて佛心をなやましむけるにか又は妄思の心より佛心を迷亂せし

三途の闇もむかはんととき何のわざをかかたんとする。佛の人を教へたまふおもふきは事よ觸れて執心なかれとなり。今草の菴を愛するも科とす。閑寂よ着するも障なるべし。いかゞ用なきたのしみを述べて、空しくあたら時をすぐさん。まづかなる時このことわりをねもひつづけで、みづからこゝろよとひていはく、世をのがれて山林よまじはるの心ををさめて、道をねこなはんがためなり。志かるをすがたへひじりよ似て、こゝろへよどりよ志めり。すみかへすなはち、淨名居士のあとをけがせりといへども、たもつ所へ、わづかよ周梨槃持がねこなひよだもおよばず。もじこれ貧賤のむくいのみづからなやますか。はた

むるにかとなり不請の念佛のすべてよき往生を遂ぐるも自業より起る事なるを自業を修めずして彌陀をのみ念したりとも佛は請けぬものなりされは心修まらずして唯舌根をやとひてせんかたなくいさゝか念佛を唱へたりとなり建曆順徳天皇の年號也建胤は長明の法名なり月影は云々雲おにてる月は入るといふ事のつらく思はるれば常住入る事なき月を見まほしと也さて絶ぬ光とは不顯光佛の常住かくる、事なきをいひてわか修行の至らねば折々心の曇ることありて見えぬをいつか常に見るよしもあれかしと願ふ意也

妄心のいたりてくるはせるか。その時心、さらよ答ふる事なし。たゞかたはらよ舌根をやとひて、不請の念佛、兩三度を申してやみぬ。時よ建曆の二とせ彌生の晦日、ころ桑門蓮胤、外山の菴よしてこれを志るす。月影へ入る山の端もつらかりき。絶えぬ光を見るよしもがな

校註方丈記終

明治二十五年八月四日印刷  
明治二十五年八月五日出版

正價金拾貳錢

版權登錄



校註者 佐々木信綱

東京市神田區小川町一番地

發行者 高橋省吾

東京市神田區表神保町三番地

印刷者 久米川治三郎

東京市京橋區宗十郎町國文社

發行所 東京堂書房

東京市神田區表神保町三番地

西關發賣元 盛文館

大阪市東區備後町五丁目



東京堂發兌圖書大賣捌所

熊	全	名	全	京	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	東					
本	古	屋	都												京					
長	三	川	東	便	大	平	中	岡	日	柳	梅	吉	福	水	信	巖	東	博		
崎	輪	瀨	枝	黑	井	村	島	本	原	原	岡	島	野	屋	慶	文	々	海	文	
次	次	代	書	書	聞	峰	支	會	兵	龜	平	書	次							
郎	郎	助	房	堂	舖	舖	雄	店	社	衛	七	助	店	郎	堂	堂	堂	館		
佐	全	全	橫	甲	全	全	靜	濱	豐	津	四	上	全	全	全	神	全	鹿	兒	島
倉			濱	府			岡	松	橋		市	野				戶				
吉	丸	弘	里	柳	廣	靜	文	谷	高	河	伊	安	舟	熊	日	吉	山	吉	田	幸
田	屋	見	瀨	正	市	源	源	須	島	九	善	精	新	久	本	岡	元	正	兵	衛
德	書	泉																		
衛	店	堂	堂	堂	藏	館	堂	郎	治	門	郎	堂	舖	堂	店	店	治	衛		
平	全	宇	全	柄	高	全	全	前	稻	上	全	全	松	長	高	大	全	水		
		都		宮	木	崎			荷	山	訪		本	野	山	津	戶			
清	手	集	城	宮	煥	報	文	煥	寺	宮	松	高	水	西	舛	澤	柳	川		
塚	英	山	川						澤	坂	美	澤	屋	且	又					
光	祐	堂	常	庸	乎	告	江	乎	鶴	新	書	琴	喜	重	堂					
堂	郎	店	郎	郎	堂	堂	堂	堂	吉	堂	堂	店	堂	郎	衛	店	店	藏		

增	橫	酒	全	全	秋	全	米	全	山	青	全	弘	全	盛	若	佐	登	石	全	全	仙
田	手	田		田	澤	形	森	前	岡	柳	沼	米	卷	臺							
東	大	鈴	片	鈴	成	須	素	八	荒	鎌	近	野	東	便	朝	近	宮	山	文	佐	木
海	澤	木	谷	木	見	佐	月	文	井	田	松	崎				源	崎	口	勘	村	
林	忠	誠	同	秋	際	權	晨	書	四	商	太	兵				商	新	之	書	文	
書	四	信	盟	穗																	
店	郎	堂	堂	堂	堂	平	平	店	郎	店	郎	衛	堂	堂	堂	店	館	助	館	店	助
全	岡	姬	松	全	鳥	柏	直	全	高	村	水	全	長	全	新	高	富	小	金	武	福
山	路	江	取	原	津	田	上	原	岡	瀉	岡	山	松	澤	生	井					
田	武	朝	川	旭	橫	中	柿	高	室	備	西	目	上	櫻	林	學	清	宇	雲	安	品
中	內	岡	山	井	村	橋	直	前	村	黑	田	井									
耳	彌	榮	日	安	正	書	三	竹	六	十	治	產									
目	三	清	次																		
堂	郎	社	助	堂	郎	吉	店	ね	郎	八	平	郎	平	作	吉	堂	堂	平	堂	郎	門
全	札	江	全	函	佐	全	長	大	柳	久	全	博	全	全	高	德	和	全	山	廣	尾
幌	差	館	賀	崎	分	川	米	多	知	島	山	口	島	道							
聚	玉	辻	愛	魁	河	鶴	安	山	一	菊	森	積	澤	山	村	阪	平	超	清	松	三
文	振	新	文	莊	常	三	三	書	書	支	善	本	中	岡	井	井	水	村	文		
堂	堂	軒	社	助	藏	郎	郎	堂	店	店	店	吉	助	店	吉	助	館	堂	助	堂	

東京堂新版發兌書目

讀賣新聞記者 小澤勝次郎君編輯 (製本既成)

明治紳士譚

每卷讀切

全二冊大版 洋裝頗美本 正價拾貳錢 郵稅四錢

日本商業雜誌主筆 坪谷善四郎君編著

日實業家履傳

每月壹回 每卷讀切

全六冊大版 洋裝頗美本 正價廿五錢 郵稅六錢

第壹卷 既成 目次 濫澤榮一君 田中源太郎君 下鄉傳 栗谷品三君 川崎正藏君 龜田伊右衛門君 守田 寶丹君 津田仙君 平野富二君 西村勝三君 岩崎彌太郎君 堀越安平君 佐藤信淵君 河村瑞軒 君 大丸屋正右衛門君 每卷石版省像筆蹟插入

校注方丈記

((成既本製))

全壹冊大版 洋裝頗美本 正價金拾錢 郵稅二錢

校註竹取物語

((成既本製))

全壹冊大版 洋裝頗美本 正價拾貳錢 郵稅二錢

樞密顧問官伯設副島種臣公題辭 頭山滿君序文 鈴木天眼 太華山人 兩君補正 今田主既君編著

國士平野國臣傳

((刻近版再))

全壹冊大版 洋裝頗美本 正價四拾錢 郵稅八錢

讀賣新聞記者 鈴木光次郎君編輯

四

明治蘭香美譚

((成既本製))

全壹冊大版 洋裝頗美本 正價拾五錢 郵稅四錢

竹柏園主人佐々木信綱先生校訂標註

校徒然草

((成既本製))

全壹冊大版 洋裝頗美本 正價廿五錢 郵稅六錢

校註土佐日記

((成既本製))

全壹冊大版 洋裝頗美本 正價拾貳錢 郵稅二錢

讀賣新聞記者 鈴木光次郎君編輯 (四版出來)

明治豪傑譚

全部三冊 完每卷讀切

全三冊大版 洋裝頗美本 正價拾貳錢 郵稅四錢

慶應義塾大學部講師 小宮山綏介君編著

近世豪傑譚

全部三冊 完每卷讀切

全三冊大版 洋裝頗美本 正價拾五錢 郵稅四錢

貴族院議員福羽美靜君題辭 宮川孫次郎君編輯

明治新政譚

((刻近版再))

全壹冊大版 洋裝頗美本 正價拾五錢 郵稅四錢

五

# 雜誌賣捌擴張

東京堂は雑誌圖書愛讀諸君の爲め便益無比なる誠實の商店なり  
 東京堂は出版事業に従事し毎月三四版宛**新版書籍**を發兌す  
 東京堂は東京大阪府下發兌數百種の**雜誌**は凡て特約大販賣をなせり  
 東京堂は東京大阪の各書林にて發行する**圖書**類は凡て御注文に應ず  
 東京堂は新版書籍雜誌の**委託販賣**を引受け發賣方を盡力すべし  
 東京堂は遞信省認可の雜誌類は**全國一般**凡て**郵便税を申受す**  
 東京堂は**發送を迅速**にし取扱上は尤も**正確**懇切に注意せり  
 東京堂は目下毎月取扱ふ處の各種雜誌の部數**非常に増加**し府下  
 同業者中**第一位**を占め居れり故に一層**奮勵勉強**すべし  
 東京堂は地方**雜誌賣捌所**へは發兌元同様殊に**薄利**を以て取引すべし  
 東京堂より諸雜誌を購讀する方は雑誌の**廢刊**又**休刊**の爲め**前金**  
 を**沒收**せらるゝが如き**損失**を受くる事なく他雜誌と引替差上申候  
 東京堂へ御送金の節銀行爲替通運貨幣便(貨幣便は配達料共費濟)  
 等適宜に宜しく候得共**郵便爲替**は**必ず**拂渡局を一ッ  
 橋郵便爲替取扱所へ宛**御振込**の事郵便切手代用の節は一割増

東京市神田區表神保町

法學士鬼頭玉汝先生序文 須永金三郎君編著

## 豪傑

((來出版再))

全壹冊 洋裝頗美本

正價拾貳錢

郵稅四錢

元田直。俗垣滿次郎兩君序文 佐藤次郎吉君編著

## 少年日本男兒

((來出版再))

全壹冊 洋裝頗美本

正價拾貳錢

郵稅四錢

朝鮮欽差大臣李鶴圭君題字 紀山松本正純先生著

## 作詩訣

((版四訂増))

全壹冊 洋裝美本

正價拾五錢

郵稅四錢

鮑菴 栗本鋤雲先生題詩 孤松 片岡政保君編著

發亭 蒲生重章先生序文

## 學生名家詩集

增補四版 近刻

全壹冊 洋裝頗美本

正價拾貳錢

郵稅二錢

三島桂洲先生校補 永井楓山先生編纂

## 文家助字彙

((版四訂増))

全壹冊 洋裝頗美本

正價金五錢

郵稅二錢

歌學專門雜誌

歌學は本邦國文學者中錚々村義象落合直文三先生の編輯監督せらるゝ毎月一回十日に發行する雜誌にして定價は一部拾錢郵便税は一冊一錢なり

第六號 八月十日發兌

# 日本歴史全書

●目次◎第一編 日本書紀◎  
第二編 日本書紀上◎第三編  
同下◎第四編 日本書紀下◎天  
書◎第五編 續日本後記◎第  
六編 文德實錄◎國史拾遺◎  
第七編 三代實錄上◎第八編  
同下◎第九編 日本紀略◎第

十編 本朝世記◎以上に掲ぐる書目は僅に十種に過ぎざれども本朝の歴史はこれにて完備すといふに  
はあらず、まづ以上の書目を刊行したらむ後は猶大に振ひてこの類の書を續刊して歴史全書の名を  
全からしめ、以て本邦歴史の全璧をつくり讀者と共にこれを不朽に傳へむ

井上頼國先生檢閲 岸本宗道 大宮宗司兩君校訂

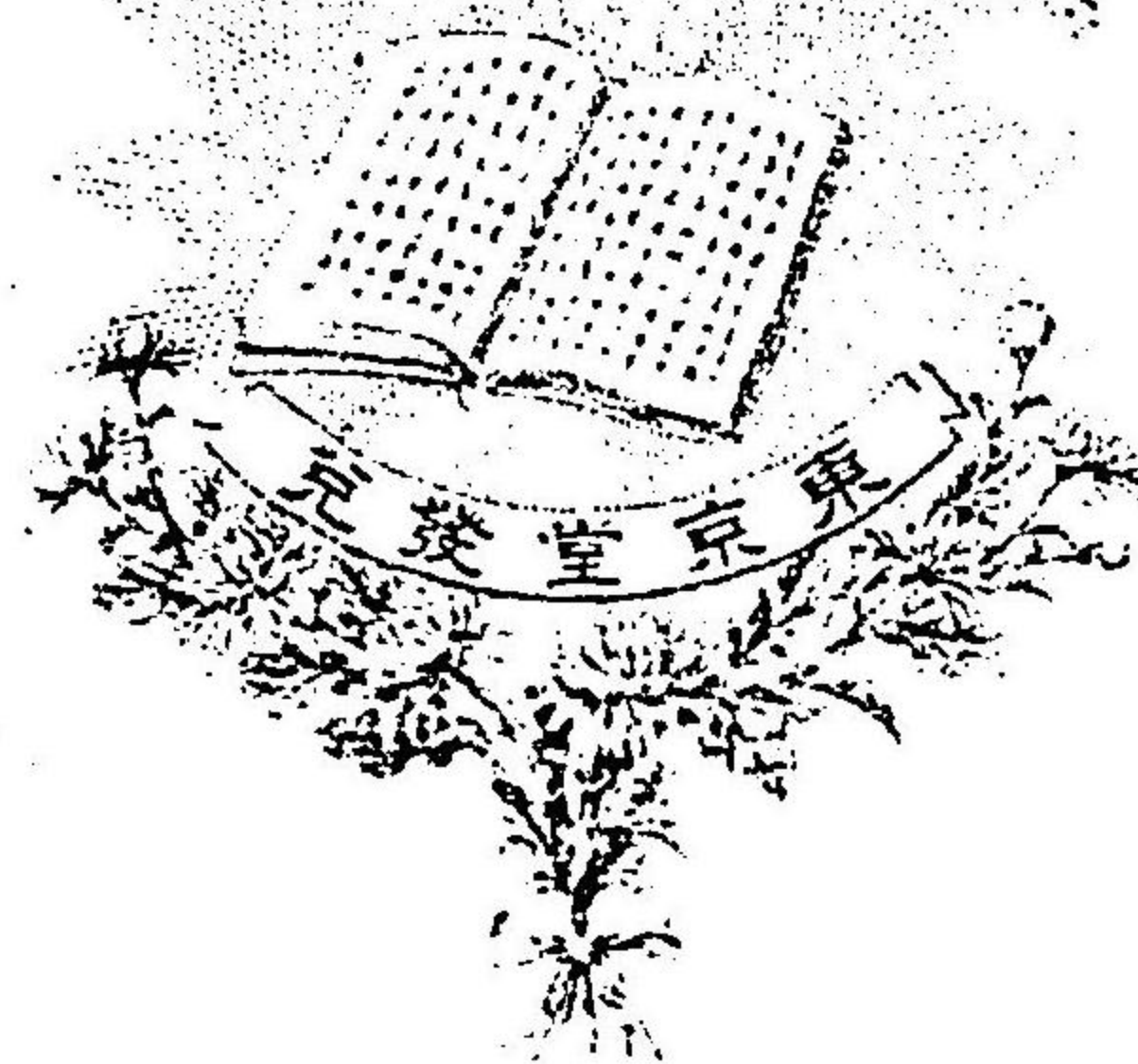
# 日本書紀

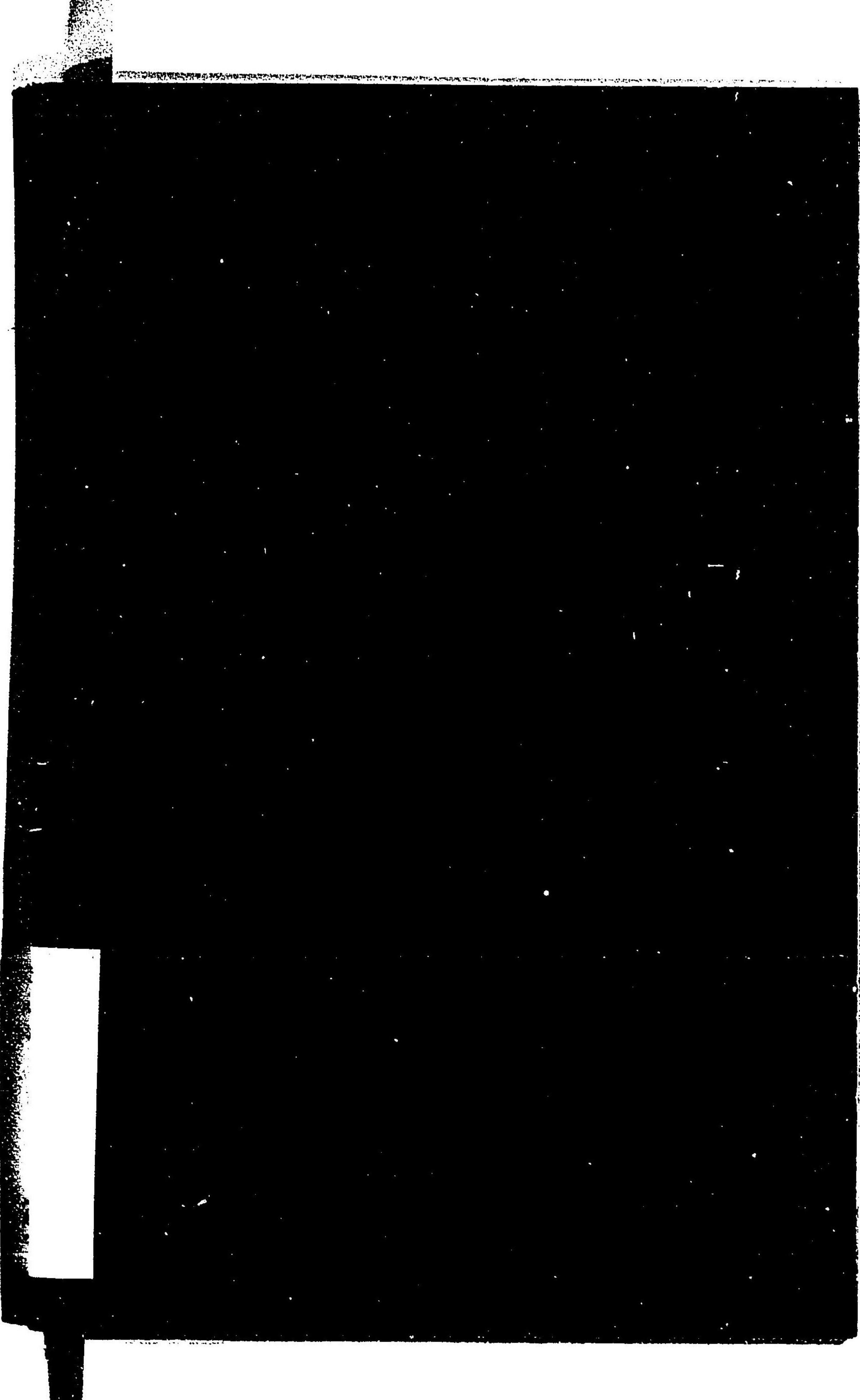
八月五日出版  
和裝大版美本 紙數百餘頁  
正價六十五錢 拾貳便錢

本書は、本朝の正史にして、元明天皇の養老四年に、舍人王、及比、太安履等の勅を奉じて撰修せられしものなり、先づ、神代卷を上下として、  
天地開闢より、皇統草創不合作にいたるまでを、第三卷神武天皇より、第三十卷持統天皇十一年八月にいたるまで、凡九百六十三年間の  
ことを載せたり、されば、この書は、我國史の最も古きものにして、その事實の正確なるは勿論、實に本邦歴史の基礎たる大典なり、故に、荷も、  
我國民たちか者は、この修むる學問の何たるをいはず、國民の義務として、必ず、先づ、本書を讀まざるべからず、昔、世に傳へられたる、  
このの刊本數種ありといへども、いづれも、皆、大部なるを以て、その價も亦隨いて貴く、得るに便ならざるのみならず、昔、世の刊本は、  
誤謬頗る多く、或は臆測私意を加へ、はしきまに變換制定したるものさへありて、初學者、このいづれによるべきかを、辨むるは、  
とに遺憾といふべし、さるに、今世出版せむとするものには、たゞ、世に流布せる書は、更なり、從來諸家の記載にか、る古本等も、悉く、こ  
れを洗滌し、中に就き、その善本を採りて、全本と定め、他の異本をも、通し對照して、その違へる所、悉く、標註に揭げたり、その考證の精確に  
して、且、周到なること、實に世間獨歩なるものなり、特に、この大書すべし、この價値の非常な低廉なることなり、即ち、この必讀に  
る書を出版するにあたりて、國中多數の人の目に觸れしめんとの微志にいてたるものなり、苟も、我大八洲の國民たちむものは、何人たるを  
らまざ、一本をえられむことを望む

一手發賣元 東京市神田區表神保町 東京堂書房

TOKIODO KANDAKU TOKIO





特45

727

佐々木信綱註

校註方丈記

国立国会図書館

095813-000-7

特45-727

校註方丈記

佐々木 信綱/注

M25

DBR-0020

